

スペイン語圏を知る本（その50）

## メキシコ・日本交流の本

評者 坂東 省次

日本とメキシコの出会いは、メキシコがまだスペインの植民地でヌエバ・エスパーニャ（新スペイン）と呼ばれていた時代に遡る。16世紀のことである。

1596年10月19日、マニラ発太平洋をメキシコ、アカプルコに向けて東航中のスペインのガレオン船「サン・フェリペ号」が暴風雨により土佐沖の海岸に漂着する事件が起こった。たまたまフィリピンでの三年にわたる布教活動を終えて同船で帰国の途次にあったメキシコ生まれの宣教師フェリペ・デ・ヘスは捕らえられ、1597年2月に長崎の西坂で内外人の25名の宣教師・信徒らとともに処刑された。後に二十六聖人事件と称される。

それから13年後の1609年7月25日のこと、同じくスペインの植民地であったフィリピンの臨時総督の任を終えてメキシコに帰国するドン・ロドリゴ・デ・ビベロほか372名を乗せたガレオン船「サン・フランシスコ号」は、マニラ発太平洋をアカプルコに向けて東航中、マリアナ諸島や日本近海で相次ぐ台風に遭遇し、9月30日の夜22時ころ、千葉県岩和田村（現在の千葉県御宿町）の沖で岩礁に座礁し、多数の乗組員が浜に漂着した。

サン・フランシスコ号が漂着した1609年は、すでに豊臣秀吉の時代から徳川家康の時代に移っていた。家康は太平洋を越えてメキシコさらにはスペインとの交易を強く望んでおり、そんな中で乗組員は岩和田村の住民に助けられ、ドン・ロドリゴは江戸で将軍秀忠に、また駿府では家康に謁見している。

こうして日本とメキシコは1596年の初めての出会いを経て、1609年には両国のトップ会談による外交交渉が実現し、これを契機として日本船最初の太平洋横断（1610）、支倉常長の慶長遣欧使節のメキシコ訪問（1615）そしてスペイン訪問（1616）へと、日本・メキシコ・スペイン交流史は展開して行った。

日本とメキシコの交流は、日欧交渉史の泰斗村上直次郎がまず注目し、『ドン・ロドリゴ日本見聞録；ビスカイノ金銀島探検報告』（駿南社）を翻訳出版する。1929年のことである。これが土台となって松田毅一が『慶長使節：日本人初の太平洋横断』（新人物往来社、1969）を書いた。松田はその前半部分をドン・ロドリゴと家康の出会いと外交交渉に割いている。

遭難したメキシコ人と彼らを救助した御宿の住民との間に生まれた交流物語から、金井英一郎の『ドン・ロドリゴ物語』（新人物往来社、1984）が生まれた。1978年11月1日、時のメキシコ大統領ロペス・ポルティエーリョを御宿に迎えて開催した大イベントの実行委員長をつとめた金井はその後、ドン・ロドリゴの足跡を追ってメキシコ、スペイン、ポルトガル、フィリピンで体験取材を重ね、名著『ドン・ロドリゴ物語』を完成させた。著者は本書を「私の織ったロドリゴは、少しロマンチストに過ぎたでしょうか。」で結んでいるが、歴史家でもない者がしかも南蛮時代の人々の心の交流を扱うともなれば、想像力を駆使する他に方法はないだろう。

その他、御宿でのメキシコ人と日本人の交流を扱ったものに、松島駿二郎『サン・フランシスコ号—ドン・ロドリゴと家康の邂逅』（『異国船漂着物語：難破者と彼らを救った浜辺の住民たちの交流秘話 第3章』）（JTBパブリッシング、2002）、小倉明『ドン・ロドリゴの幸運』（汐文社、2008）などがある。

『ドン・ロドリゴ日本見聞記』の現代語訳が1993年に本学の大垣貴志郎教授の手で刊行されている。本書を手を、今から400年前に始まった日本とメキシコの交流史に思いを馳せてはいかがだろうか。

ばんどう しょうじ（教授・スペイン語学）